

## 【コメント】貴族の集団形成と紛争のルール

著者	早川 良弥
雑誌名	公家と武家      その比較文明史的研究
巻	22
ページ	81-85
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	Comment
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00002811">http://doi.org/10.15055/00002811</a>

## 【コメント】

### 貴族の集団形成と紛争のルール

早川 良弥

梅花女子大学

ヨーロッパ中世の貴族は、基本的に戦士貴族である。その戦士貴族が、各地域で自立的な固有の支配領域の形成に努め、また王国の統治にも関与した。さらに、彼らの家族ないし一族の者が、高位の聖職を握り、聖界貴族をなした。以下に、「貴族」の用語は、原則として「戦士貴族」の意味で使用する。

アルトホフ教授の報告の要旨は次のとおりである。ヨーロッパ盛期中世における貴族の社会では、暴力は無制限・無制約に行使されるのではない。武力の使用にあたって一定のルールが適用され、暴力を回避ないし抑制する戦略が知られ、利用された。このルールに従って、仲介者をとおして紛争当事者間にコミュニケーションが維持され、和解による闘争の終結が図られた。このルールは、成文化されない慣習ではあったが、それでも拘束的に作用した。闘争の開始から、その経過、そして決着にいたるまで、それぞれの局面に対応した技術・作法があり、貴族はこの規則に義務づけられていた。

こうした紛争のルールの適用は、アルトホフのこれまでの諸研究に即してみても、同時期の社会および王国のありようと構造的に関連させて説明し得ると思われる。すなわち、ひとつには、20世紀前半以降の研究が明確にしたように、ヨーロッパ中世には近代的観念によって説明しうるような制度的国家は存在しない。中世の王国は、人的結合に基づく集団、つまり、主従の関係を成立させるヘルシャフト的結合、同格者仲間間で結ばれるゲノッセンシャフト（共同体）的結合、および家族的結合、この三結合を原理とするさまざまな集団から構成される。そして、国王が介入しうるのは彼と直接的結合関係にある人物たちに対してのみである。この条件の故に、国王は王国統治にあたってそれらの人物の服従だけではなく、むしろ彼らの援助と同意を必要とし、国王の権力行使は制限される。国王裁判による紛争の決着も困難であり、仲裁と和解による決着にアクセントが置かれる。

他方、貴族は親族、家臣、友人の支持を得て効果的な支配を行い、権力と地位を高め、維持する。闘争にあたっては、友人からの援助を求める。しかし、そのために、彼らとの協議と合意が求められ、その行動に制約を受ける。そのさい、友人関係をとおして敵対者との交渉も可能となる。なお、中世における友情は感情的結合ではなく、契約的性格を持つ結合、友情同盟である。二人以上の人物が結合する場合には、それはゲノッセンシャフト的結合となる。

貴族史の理解について、アルトホフは、従来の研究がこのようなさまざまな人物関係の意義を十分に考察し評価してこなかったことを指摘する。そのうえで、彼は、家族・親族集団および家臣・従者の集団に加えて、友情同盟・ゲノッセンシャフト的結合に基づく集団が貴族支配の人的基盤を広げたことを強調する。そこで、貴族の集団形成に関するアルトホフの研究を簡

単に紹介するが、それにさきだち、基本史料となる記念資料について説明しておく。

最近（20世紀後半）のドイツにおける中世貴族史研究を推進させた最も重要な基礎作業のひとつは、記念資料（Gedenküberlieferung, Memorialüberlieferung）の利用である。というのも、通常の史的史料では、貴族は個人として登場するのであって、集団として記述されることはない。それに対して、記念資料には貴族が集団として記録されている。ここで記念資料というのは、宗教施設、とりわけ修道院が祈禱を行うときに使用する人名記録簿である。日本の過去帳と比較しうる資料である。ヨーロッパ中世の修道士集団は、幾つもの修道院との間で、死後の魂の救済・平安を得るため互いに相手のために祈禱すること、すなわち祈禱援助（Gebetshilfe）を提供しあう盟約、いわば祈禱において兄弟になるという祈禱兄弟盟約を結んだ。盟約は、仲間のひとりが死亡した時に行うべき祈禱行為を約束して結ぶのだが、その時に、修道士たちは、相互にそれぞれの修道士集団を構成する人名リストを交換し、場合によってはこれを記録した。

この盟約には俗人である貴族も参加し得た。ただし、俗人は、祈禱能力を持たず、したがって自ら祈禱援助を提供することはできない。そこで、彼らは、修道院への物的贈与に対する返礼として、大抵はもちろん土地寄進に対する代償として、祈禱援助を約束され、修道院の祈禱仲間に加えられた。盟約を結ぶ貴族は、殆どの場合、彼の属する集団を代表しており、彼の理解する集団のリスト、それ故に時には死者をも含めた集団のリストが提示された。

記念資料には二つの主要な形式がある。ひとつは、「祈禱兄弟盟約者名簿（Liber vitae, Liber memoriales）」で、伝来するものはそれほど多くない。いずれも、8世紀後半ないし9世紀前半に作成され、10世紀まで使用された。最初はこの記録簿を作成する修道院ごとに何らかの編集方針があり、例えば身分別に、あるいは男女別に、あるいは生者と死者を区別するなど、人名を分類して記録していた。しかし、この構想はまもなく維持されなくなり、修道院は盟約相手の人名リストを編集することなく書き写した。その結果、盟約者名簿には、死者と生者を含めた多様な集団の、その時々には彼らが意識する集団構成がそのまま記録されることになった。

記念資料のもうひとつのタイプは、「ネクロロギウム(Necrologium)」である。これは、カレンダー形式による死亡者記録である。1ページを数日ないし十数日に配分した一年のカレンダー帳を作成し、または、同じくカレンダー形式の「殉教者祝日表」の余白を利用して、日付ごとにその日の死亡者の名前を記載する。ここでは、死亡者を命日ごとに個人として記載するのであるから、直接的に集団が記録されているわけではない。しかし、記載された人物を同定することによって、ネクロロギウムを集団の記録として捉え得ることもある。（他に、年表形式で死亡者を死亡順に記録する「死亡者年譜」があるが、極めて例外的である。）

記念資料の構造を明確にし、これを歴史研究の史料として開拓したのは、カール・シュミートKarl Schmidであった。シュミートは、とくに「祈禱兄弟盟約者名簿」に記載された俗人を主体とする人名リストの中に多様な貴族の親族集団を発見し、その検討と分析に基づいて、貴族史研究に関する史料を豊かにするとともに、中世における貴族の構造について鋭い洞察を行った。中世初期の貴族と中世盛期の貴族の間に見られる構造転換、すなわち、双系的親族集

団から男系的家門へという貴族の家族的集団に関する自己理解の転換、そしてそれに対応する領域的支配権力の確立、の指摘である。このシュミートの見解は、詳細における修正や批判は免れないとしても、中世貴族史を理解する基本的シェーマとして認めておかねばならない。

さて、記念資料開拓に関するアルトホフの業績は、二つに分けることができる。ひとつは、「祈禱兄弟盟約者名簿」に関するものである。盟約者名簿に記載される俗人の人名リストは、実はすべてが貴族の親族集団を示すわけではない。むしろ、貴族の家族を中核としながらも、彼らの血縁関係や結婚結合だけでは説明できない、そして一般的には親族集団よりも規模の大きい集団のほうが、圧倒的に多く記載されている。アルトホフは、これらの集団を、通常の史料で *amicitia*, *pactum* その他の名称 (*pax*, *foedus*, *coniuratio* など) で呼ばれる *Bündnis*, *Einung*、すなわち (友情、友好) 同盟ないし盟約を結ぶことによって結合したゲノッセンシャフトまたはその性格を持つグループであると推定した。このようなリストの記載は、9世紀の後半から増加し、10世紀初期、国王ハインリヒ一世期 (919-936) に最大となり、記載の「波」あるいは「運動」と形容し得るほどとなる。ところが、次王オットー大帝期 (936-973) になると、その運動は途絶え、以後、この種の記載は皆無ではないが、極めて少なくなる。そこで、この現象が、ハインリヒ一世の政策あるいはその時期の政治史と関連付けて、つぎのように説明されることになる。

ハインリヒ一世は、カロリング帝国解体の直後に王位についた。彼の直面する最大の政治課題は、政治的社会的混乱を招いてきた要因に対処すること、つまり、王国内部の政治的対立を抑えて王国の統合を固めることと、東からのマジャール人 (ハンガリー人) の襲撃を防衛することの二つであった。これに対するハインリヒの統治を、同時代の歴史記述は、「盟約」と「平和」の二つの概念で特徴づけている。実際、ハインリヒが盟約ないし同盟を盛んに締結したことは周知のことである。彼は、外国の王たちと *amicitia* (友情同盟) を結んだだけではなく、王国の大公 (彼の王国は4ないし5大公領より構成される) たちとも *amicitia* を結んだ。国王とその家臣である大公との間にはヘルシャフト的結合関係がある。その結合を、ゲノッセンシャフト的な友情同盟が補完し、いっそう強固にしたわけである。さらに、これは直接的証拠があるわけではないのだが、ハインリヒがグラーフ (伯) や司教たちと、さらにはより低位の者たちと盟約を結んだ可能性もまったく否定することはできない。

つぎに、対マジャール政策に関しては、ハインリヒは、926年にマジャール人との間に9年間の休戦協定を結び、この休戦期間を城砦建設ないしは城砦の防御施設を強化するために利用した。そのさい、この城砦勤務にあたる者たちにハインリヒは集会、祝祭、会食を防備された城砦の中で行うよう命令する。このことは、城砦勤務者たちがゲノッセンシャフト的集団を形成していたことを予想させる。また、城砦建設には修道士たちも携わり、場合によってはこれをとおして城砦勤務の集団と修道士集団との結合が成立した可能性も考え得る。ともかく、防衛の準備は順調に進んだらしく、9年を待たずして、ハインリヒは932年に休戦協定を破棄する。このときにハインリヒは *populus* (王国の住民) との間に *pactum* (協定) を結んだ、と伝えられている。マジャール人に対する戦いにおいて国王を援助すること、教会財産への侵害を拒絶すること、さらには財政援助によってこれまで侵害されてきた教会の再建あるいは改善

を助けること、などが協定の内容である。これに対して、教会は、そのような改良のための援助を行う者のために、および彼らの祖先のために、祈禱援助を行うことを決定した。

つまり、ハインリヒ一世の盟約と平和に基づく統治、とりわけマジヤール人襲撃に対処する一連の措置が、もちろんそれが唯一の原因ではないが、祈禱兄弟盟約書における俗人集団の「記載の波」をもたらす極めて重要な契機であった。アルトホフのこの説明をとおして注目しておかねばならないのは、社会的政治的危機にさいして、貴族たちが盛んに共同体的集団を形成したと仮定し得るということである。

記念資料に関するアルトホフのもう一つの業績は、ネクロロギウムを貴族研究の史料として開拓したことである。そのさい重要なのは、貴族家が建立した家修道院（Hauskloster）のネクロロギウムである。家修道院は、建立家の墓所となり、家門の精神的中心としての機能を果たす。つまり、家修道院は、建立家の家族、祖先、親族を記憶し、彼らのための記念祈禱を行い、家門の歴史意識を育む。さらに建立家は、親族者以外にも、彼らが祈禱援助を約束した他の人物たちのための祈禱をも、その家修道院の修道士集団に託した。これにより、修道士たちはネクロロギウムに、自分たちの死亡仲間とともに、祈禱を託された建立家家族とその関係者たちの名前を記載した。そこで、そのようなネクロロギウムの構造やそこに記載された人物たちの相互関係を分析・検討することによって、当該貴族家研究の素材を得ることができる。アルトホフは、具体的には、例えば、10世紀末期から11世紀を通じてザクセン大公家であった「ビルング家（Billunger）」の家修道院のネクロロギウムを検討し、ビルンガー史の再検討を迫る新たな視点と素材を提示した。

ビルンガー史について語るのは、ここでの課題から外れる。ただ、貴族の集団形成に関連する事実をひとつだけ取り上げる。それは、10世紀初期から80年代までの死者としてこのネクロロギウムに記載された人物の中心をなすのは、ビルンガー大公家の祖先たちと、そして彼らがオットー大帝に対して共に戦った反乱の参加者たちである、ということである。このことは、当時の反乱参加者が互いに祈禱援助の提供を約束していたのであり、かつ彼らがその約束した義務を果たしていたことの証拠である、と考え得る。

この観察が、反乱者たちを組織づけている結合原理について示唆を与える。10世紀には、オットー大帝期およびそれ以後、しばしば、国王たちの兄弟、息子、従兄弟を首謀者とする反乱（coniurationes）が起こった。この一連の反乱については、次のような事実が注目される。すなわち、反乱に参加したのは最高位の貴族たちであるが、彼らの一部は王家と親族関係にあり、それ以外の者も王家ないし宮廷と密接に接触していた。また、反乱に加わる人物の範囲は比較的固定しており、同じ人物が幾つもの反乱に参加し、あるいは同じ家族の異なった世代が新たな反乱に参加した。つぎに、少なくとも一部の反乱については、反乱者たちは、蜂起にさいして、特定の場所に集まり、その場所で集会を開き、共同の会食（convivium）を催した。そして、反乱者たちは、ネクロロギウムからの知見が示すとおり、相互に祈禱援助を約束していた。

最近の研究によれば、誓約、会食、死者記念が、ゲノッセンシャフトの構成的要素である。そこで、次のように考えることが可能となる。すなわち、10世紀の国王に対する反乱者は、

蜂起の時々は何らかのそのとき限りの理由（例えば、政治目標や利害関係の一致、首謀者からの報酬の約束）によって集まるのではない。彼らは、祈禱援助を含む広範な相互援助を約束するゲノッセンシャフト的集団を形成して、それを比較的長期に持続させており、その集団のメンバーとして、つまり、そのメンバーが負う援助義務を果たすものとして、反乱に参加したのであった。なお、このような推定が、上記の祈禱兄弟盟約者名簿に記載された俗人の集団をゲノッセンシャフト的集団と仮定するひとつの根拠である。

最後に、アルトホフの論じる前期中世の集団形成と紛争のルールとの関連を整理し、あわせて、盛期中世への移行にさいしてさらに問われるべき問題点を指摘しておきたい。

貴族のゲノッセンシャフト的結合を示唆する証拠は、記念資料以外のところでは見出せない。そのため確実とは言い難いが、推測するならば、貴族の共同体的集団形成は、9世紀後半から、つまり社会的政治的危機が深まる時から盛んとなったであろう。危機的状況を背景とするその集団の目的や期間は、アルトホフの言うとおり、特定されることのない、死者記念を含めた広範なものであったと考えられる。勢威を失ったカロリング末期の王権や、王家としての権威を確立し得ていない10世紀初期の国王たちは、共同体として結合する貴族に大きく制約される。これに対応するのが、盟約に基づく有力貴族との和合を目指す上述のハインリヒ一世の政策であった。この政策は一定の成功を収め、ハインリヒは彼の獲得した王位を子孫に継承させることができた。しかし、彼の息子、オットー大帝は、父王の政策を継承しなかった。彼は、貴族を友情盟約のパートナーとなり得る同格の仲間とは認めず、家臣としての貴族に自己の決定権を貫徹しようとした。この政策が反乱を招き、そして、その反乱は親族集団およびゲノッセンシャフトを基盤として拡大した。強力な反対勢力の故に、反乱を終結させるときには、オットー大帝も紛争のルールに従う技術と手続き適用しなかった。

だが、その後、貴族の構造転換が進展する。11世紀後半ないし12世紀以降、各貴族家の支配権が確立し、それとともに貴族層内部の政治的階層秩序が固定する。この段階にいたっても貴族のゲノッセンシャフトが形成されたのか否か、はさらに検討が必要である。いずれにしても、貴族相互の結合は、目的と期限を特定した、攻守同盟に近い同盟関係に重心を移す。そのような変化は、紛争のルールの内容と意味に変化をもたらしているのだろうか。

#### 【参考文献】（以上の議論に関するGerd Althoffの主要著作）

- Adels- und Königsfamilien im Spiegel ihrer Memorialüberlieferung. Studien zum Totengedenken der Billunger und Ottonen, 1984
- Verwandte, Freunde und Getreue. Zum politischen Stellenwert der Gruppenbindung im früheren Mittelalter, 1990
- Amicitia und Pacta. Bündnis, Einung, Politik und Gebetsgedenken im beginnenden 10. Jahrhundert, 1992
- Spielregeln der Politik im Mittelalter. Kommunikation in Frieden und Fehde, 1997